



「モグ太」です。

今回は、令和7年度の調査研究計画について紹介します。

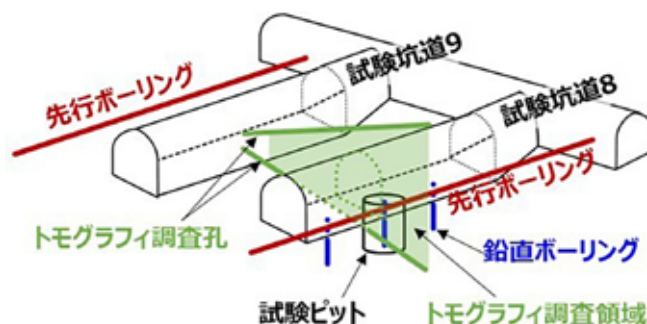
【令和7年度の計画】

幌延深地層研究センターが「令和2年度以降の幌延深地層研究計画」で取り組んできた必須の課題のうち、多くの課題が令和6年度までに当初の目標を達成しました。そのため、令和7年度以降は主に「坑道スケール～ピットスケールでの調査・設計・評価技術の体系化」という課題に取り組みます。なお、「坑道スケール」とは、実際の処分場において多くの坑道が地下深くに掘削される際に、それらの配置を検討するために必要となる、数百メートル程度を指し、「ピットスケール」とは、廃棄体および人工バリアを垂直に設置する場合に坑道の床面から掘削されるピットの配置を検討するために必要な数十メートル程度の範囲を指します。

この体系化の課題は、これまで取り組んできた個別の課題で得られた成果を統合、整理し、「実際の処分場を建設する際に、地下深部で坑道や処分ピットなどを掘削する場合、どのような考え方の下に坑道やピットを配置するか、どのように人工バリアを設置するのか、さらに人工バリアや周辺岩盤の閉じ込め性能をどのように評価するのか」といった調査研究を進めます。

いくつか例を挙げると、深度500mの試験坑道8および試験坑道9の掘削前に行った先行ボーリング調査で、坑道周辺の岩石の強度などのデータを取得したり、試験坑道8の掘削前後に試験坑道9から掘削した調査孔を用いた*トモグラフィ調査を通じて、坑道を掘削することにより生じる影響が及ぶ範囲がどの程度かなどを把握したりします。また、深度350mの試験坑道6で計画している坑道の埋め戻しおよび止水プラグの設置について、設計を行うとともに原位置試験のレイアウトなどの計画検討などを進めます。

*トモグラフィ調査：調査対象範囲内の振動や電気の伝わり方等を計測して、岩盤内部を可視化する物理探査手法



【原位置試験のイメージ（深度500m）】



【先行ボーリングのコアの観察】

お問い合わせ先 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 幌延深地層研究セ
ゆめ地創館：電話・告知端末機 5-2772 <https://www.jaea.>